川柳の「読み」について

川柳マガジン東京句会　世話人　松橋帆波

川柳マガジン二月号８９ページ「難解句鑑賞」に、次のような文章が載っています。

難解句鑑賞　いとう岬

「十九歳からキリンを変えられず　　丸山芳夫」

この場合の「キリン」は動物をさすのではなく、作者にとっての「なにか」である。僕はバイク漫画の「キリン」を想定してみた。バイクを草食動物、車を肉食動物であると喩え、「肉食動物」にも立ち向かっていける「草食動物」でありたいと願うバイク乗りの漫画をモチーフとしたならば、このキリンはバイクのことである。
しかし、その想定は普遍的認識とはいいがたいので、「キリン」の意味は読者がそれぞれにイメージすればよい。

　このコーナーは読者から寄せられた難解句を鑑賞するというものです。
当該作品は「十九歳」と「キリン」つまり「未成年」と「麒麟ビール」の同時存在に意味があるのですが、東本昌平氏の漫画「キリン」と対比して解釈されてしまうと「十九歳」という数字まで動いてしまい、余計難解な作品になってしまいます。

今回は、川柳を作るのではなく、「読み」として考えてみたいと思います。

それでは、
次の作品を鑑賞してみましょう。

A　チルチルとミチルでハローワーク混み

次はこの作品。

B　鳥かごの中で覚めない夢を抱く

では次。

C　その昔ブルーバードに乗っていた

最後にこの作品です。

D　白い鳥ばかり　私のレクイエム

Aは、「チルチルとミチル」という「青い鳥」を連想させる言葉を用い、ハローワークと組み合わせることで「青い鳥症候群」を連想させるつくりになっています。

Bは、「青い鳥」は鳥かごの中にいたという童話のエンディングと、実はそこからも逃げていってしまうという戯曲の筋立てを元に、「夢ばかり見ている」という登場人物（作者）を否定的に表現しています。

さて、**C**です。

単純にブルーバードという自動車（日産車）に乗っていたという報告ですが、「希望」を象徴する「青い鳥」を英語にした「ブルーバード」という車名の車に乗っていた、という事を過去形にすることによって「青い鳥はもういない」という暗喩を働かせているともとれます。

問題は**D**です。

ABCと来てDを読むと「白い鳥」とは「青い鳥が白くなった」つまり「色が抜けてしまった」という連想をしてしまう可能性が出てきます。実際にそのような解釈も成り立ちますが、Dの作品は「私のレクイエム」という言葉によって、読者が連想を広げるだろうということを前提に、前の部分を継ぎ足しただけの作品です。

例えば「三日月の雫」「鈍色（にび）のカルマ」「時鳥啼いて」など、「私のレクイエム」を補完する言葉・表現であれば、それらしい句に仕上がっていきます。

このＡＢＣＤという流れは、「難解句を作ってしまう読みの流れ」を模式化したものです。Cの解釈も「暗喩を働かせている」というところまで読むのは、通常は無理があるでしょう。

競吟句会では、「課題」が与えられ、出句作品は「課題を処理し、意味が与えられている」という前提で、参加者は披講を聞いています。従って「課題の処理」に対して句会という場は「共通の認識」を持っているわけです。また選考者は声で伝えるのですから、音で伝わること、伝えられることも選考の基準になります。

しかし、川柳には句会というジャンルだけではなく、活字として鑑賞するという世界もあります。いわゆる「読み」の世界ですが、ある言葉とある言葉を足すことによって生まれる「印象の世界を楽しむ」いわば絵画的発想で句を作る、そういった川柳も存在しています。記憶に新しいところでは、川マガ2008年1月号で普川素床氏がその製作過程を述べておられます。

このような川柳を「読む」場合、問題となるのは「言葉の隠語性」です。言葉の意味が異化されている場合が多いので、集団の中で通用する解釈が一人歩きしてしまわないように、参加者がそれぞれ自由に評を発表でき、互いの批評が十分にできる環境が整わなければなりません。Cのような作品を暗喩として解釈することは自由ですが、難しく解釈することが、深く解釈している、正しい解釈である、というように権威的になってしまうことには注意が必要でしょう。Dの場合のように頭から「鳥は青い鳥だ」と見てしまうと「鳥」という言葉の異化が隠語性を持ってしまいます。

芳夫さんの作品の場合で見れば「キリン」が異化されたもので、その言葉が持つ隠語性を理解しようという鑑賞になっています。これでは作者の発見や見立ての妙が生かされません。難解ではない作品を難解句として一人歩きさせてしまわないよう、川柳作品鑑賞は、いろいろな見方を交換し合えるような仕組みと、違う解釈も聞き入れられる幅を持たせたものでありたいと思います。

「読み」ということで少し書かせていただきましたが、難解な作品を頭から「川柳ではない」という見方も、硬直的かと思います。必ず意味があって意思があるという作品と、そ

うではない作品の世界があるということだけでも、知っておいて頂ければ幸いです。

（帆波）

では次の作品はどうだろう

モンブラン　イチゴ牛乳　青い空

一読して、どんなイメージが湧くだろう。

この作品は、ある高校生が俳句の授業で作るのが面倒くさくて、ケータイで女優の名前を検索し、五音、七音、五音になるように名前の表記を変えて並べただけのものである。

それぞれ、紋・ぶらん　苺ミルク　蒼井そら、というタレントの名前である。

従って、作者は何の意味も意図していない。しかし読み手によってイメージや意味が形作られ、評価が生まれて行く。